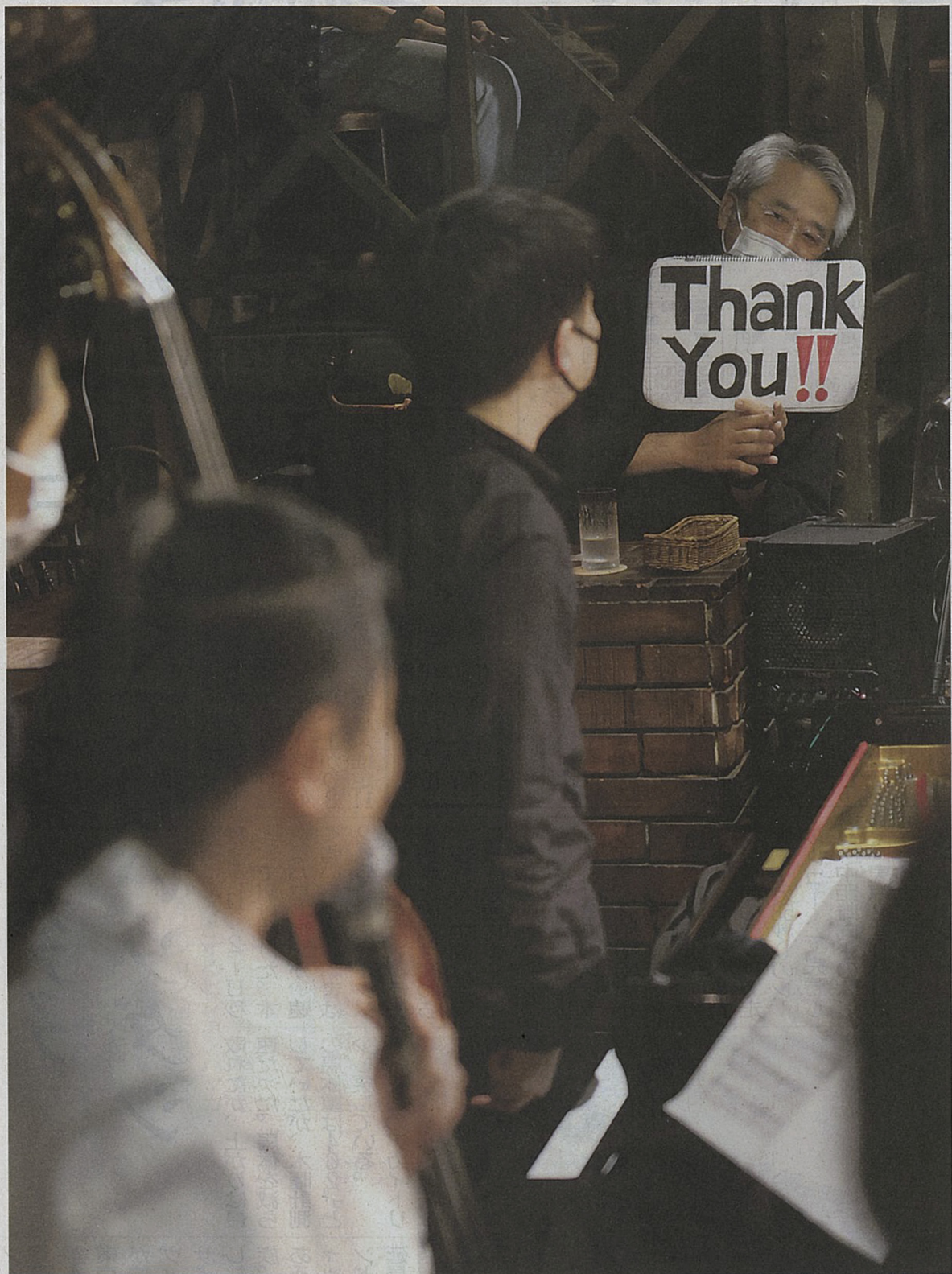




ジャズのライブを楽しむ男性。「制限されても絶やさなくてやり続けることが大事」と語る。この日はメッセージを書き込んだスケッチブックを持参し、声を出さずにミュージシャンに感謝を伝えた＝「サムタイム」で

ライブハウス



ジャズクラブ「サムタイム」でライブを楽しむ人々。入りの扉は換気のため開けたままで、客も飲食時以外はマスクを着用し、大きな声を出さず静かに音楽を楽しんでいた＝東京都武蔵野市で



音楽を止めるな！

新型コロナウイルスの感染拡大でイベントが激減し、音楽家は発表する場を失い、音楽を楽しむ人たちの機会も失われた。厳しい状況下で音楽の灯を消さないよう活動を続ける人々を追った。

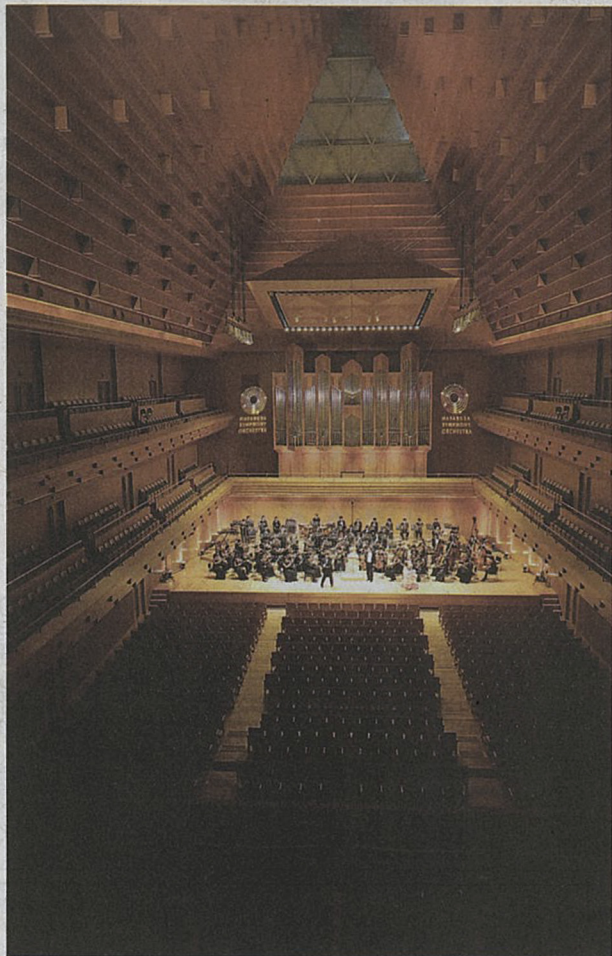
45年続く東京・吉祥寺のジャズクラブ「サムタイム」。十数人の客が入り、ノンアルコールビールを手に午後6時半の開演を静かに待っている。この一年、ツアーやジャズフェスが軒並み中止になったのはつらいですね」と語るのは、ジャズトランペッターの中村恵介さん(43)。この日5人で約1時間のライブを行った。「ミュージシャンは演奏することが人生。ライブハウスで音楽を楽しんでほしい」と話す。売り上げが6割以上減った同店では、常連客らがクラウドファンディングを行って、店やミュージシャンを支えている。店長の宇根裕子さん(57)は客から、「元気になったわ」などと声をかけられることが多い。だからこそ「コロナが終息しても、ライブハウスがなくなれば、ミュージシャンもお客さんも行く場所がなくなる。その日まで必ず店を守りたい」と誓う。

宣言により、無観客ライブ配信に急ぎ変更した。同楽団はNPO法人「友情的架け橋音楽国際親善協会」が主催し、音楽系大学の学生を中心に「音楽と社会貢献」を形にする活動を続けている。今回はプロの音楽家も招き、医療従事者へエールを送る公演だった。昨年は国内3公演と海外公演がすべて中止となった。団員の学生は地方にいても鑑賞できる配信ならではの良さを感じつつも、「次は人前でやりたい」と意気込む。

音楽家を目指す学生が集まる東京・立川の国立音楽大学。プロを目指す和田央さん(25)は大学院修士課程で音楽を専攻する。個人レッスンでは飛沫防止のパーティションの前に立ち、「同じ空間にいれば音を共有できる」と思っていたけど、あの一枚があるだけで全然違う」と日々の苦労を語る。音楽家にとって厳しい時期だが、夢は失っていない。「コロナで自分自身は舞台に立ちたいと気づき、本番のありがたみを感じることができた。将来は日本だけでなく世界の舞台に立ちたい。いつかコロナを考えずに音楽ができる日が戻ってくる」と信じている。その時、一番輝いている自分を見せられるように、その準備期間として今を捉えている。

写真・文 佐々木順一
(すべて5月に撮影)

コンサートホール



3度目の緊急事態宣言発令により無観客ライブ配信に切り替えた「交響楽団はやぶさ」の公演。出演者は全員PCR検査を受けて臨んだ。今年は観客を入れて開催するはずだったチケットも売れず、1000人以上の来場客を想定していた＝東京都新宿区の東京オペラシティで

交響楽団はやぶさは7月4日の公演に向けて本会場での練習を行った。コロナ下で学校や公共施設が使用できなくなり、練習場所の確保に苦労した。この日時間を見つけて、ロビーでホルンの練習をする団員の姿があった＝埼玉県川口市の川口総合文化センター・リリアで



音大生

国立音楽大学で声楽の個人レッスンを受ける大学院生の田中さん。感染対策で教授との間にはパーティションが設置されている



声楽専修の4年生が出席したオペラの授業。ハンガーラックを使用したパーティションを設置し、学生たちはマスクをつけて歌っている＝東京都立川市の国立音楽大学で



もっと知りたい